

平成 23 年度地域貢献特別支援事業報告書

「国際開発学の地域活動への適用による地域人材育成支援事業」

長野県阿智村立清内路小学校と留学生の交流

I 事業の目的

日本では、山間地等の地域社会が、急速なグローバリゼーションと市場化、過疎高齢化の中で活力ある地域として存続するため、様々な努力をしている。国際協力事業は、国内に示唆のない、途上国への一方的支援と捉えられがちだが、実際には相互に知見を活かせる部分が少なくない。本事業では、設立以来20年を経て国際開発研究科に蓄積されてきた日本発の開発学の知見を活かして、日本国内の地域の住民主体の地域活動を支える組織・制度の構築を支援する。また、日本国内と開発途上国の両方における自律的な地域振興の双方向の学びに発展させる仕組みづくりも目指す。

連携先である阿智村（旧清内路村）は2007～2009年度に研究科事業として、大学院生による国内実地研修を行っている。そこで培われた村との関係と調査結果を基に、過疎集落の小規模校で、地域住民参加による学校運営の活性化を支援する。

もう一つの瀬戸市は焼き物を通じた生涯学習が実施されており、昨年度のJICA「ベトナム道の駅地域振興機能強化計画」研修でも注目されており、今年度は研修受け入れ効果の地域へのフィードバックを中心に支援する。

可能であれば、次年度以降の自律的事業展開の準備を行う。

II 実施担当者

■名古屋大学関係者

山田肖子 国際開発研究科 准教授

牛長松 国際開発研究科客員研究員(師範大学準教授)

Aaron Benavot ニューヨーク州立大学アーバニー校教授(広島大学に客員教授として滞在中)

■協力者

阿智村役場協働活動推進課長 林茂伸

阿智村立清内路小学校 校長 矢崎進一

同 国際交流担当教諭 山下憲一

■学生スタッフ

| | | | |
|---------|--------|----|-----------------------------|
| 国際開発研究科 | 博士前期課程 | 2年 | 花井一太郎、Jacob Ojeah |
| 同 | 同 | 2年 | Sokhom Leang |
| 同 | 同 | 1年 | Bunnara Leng、桐田奈々、Nory Dysi |
| 同 | 同 | 1年 | Sorana Touch、Vanmaren Seng |

III 活動内容

■ 過疎地域の小学校生徒、教員と、国際開発研究科在学留学生の交流

平成 24 年 1 月 21 日から 1 月 22 日にかけて、留学生を中心とする、国際開発研究科教育人材開発プログラム在籍の学生が長野県阿智村立清内路小学校を訪問し、生徒との交流、教員との意見交換を実施した。(教員 1 名 院生 8 名 参加)

IV 成果と見通し・評価

2009 年 4 月に阿智村と合併した旧清内路村は、近年の晩婚化や労働人口の都市部への移動などに伴い、人口減少が進む地域である。今回訪れた清内路小学校も全校生徒 31 名、職員 12 名という小規模校である。

昨年同様、村役場の協働活動推進室、清内路小学校長や国際理解教育担当教員と事前協議を重ね、生徒たちと留学生との触れ合いの場を設け、生徒たちが国際的な事柄に関心を持ってもらえるよう交流会を企画した。また、国際開発研究科において発展途上国の教育問題を学ぶ学生と清内路小学校長と、過疎化が進み生徒数が減少傾向にある同校の教育運営、地域住民との関わりについて、意見交換を行った。

生徒との交流プログラムでは、本研究科に所属する留学生 6 名（カンボジア人 5 名、ナイジェリア人 1 名）が中心となって、出身国の紹介やクイズ、伝統ゲームなどを行い、生徒たちと交流した。熱心に交流プログラムに参加し、各国に関する様々な疑問を留学生に投げかける生徒の姿からは、海外への高い関心・興味を伺い知ることができた。その後行われた全校生徒による縄跳び検定では、それぞれが目標に向けて、お互いを励まし合いながら取り組む姿が見られた。しかし一方で、少人数が故に、生徒間の競争が少なく、教育現場での生徒のモチベーション維持に苦心する教員の声も聞かれた。

その後の校長との意見交換会では、清内路地区での過疎化の現状や、学校運営状況を伺い、複式学級を行う際の教員の工夫や、複式学級が及ぼす生徒への影響などに関して、学生らと議論を行った。また小規模校では、職員の数が限られていることから、



学校運営に地域の協力は不可欠である。このため、清内路小は村の教育委員会、自治会や保護者と定期的に会合を設け、地域全体の学校運営に対する参加意識を高める取り組みを行っている。近年、発展途上国でも教育セクターにおける地方分権が進んでいる。住民主体の学校運営という途上国と共通する課題に向き合っている清内路小にとって、学生からの意見は、今後の同校の運営政策を考えるうえで非常に有益であった。また同時に、学生にとっても清内路小の現状を知ることは学びになった。

これからの地域作りを担う子供たちが、生まれ育った地域に愛着を持ち、将来の地域貢献に携わっていくアクターとして成長していく過程において、教育の果たす役割は少なくない。清内路小では、生徒と地元住民との交流の場を設けるなど、地域理解を高める取り

組みを積極的に行っている。今回の交流会では、これら清内路小の取り組みと類似する途上国での活動の情報を校長と共有できた。清内路小にとって今後の手がかりに繋がる意見交換を行うことができたであろう。本交流会は、教育現場を通じた地域振興のあり方を考えるという面から、地域が普段知ることの少ない途上国での事例から学ぶことが多いにあり、実りある事業であった。

今後の課題

地域の教育現場が果たす、地域振興を担う人材育成の役割に関して、学問的な研究が十分蓄積されているとは言えない。本事業で得られた知見、示唆を事業参加者だけで完結させるのではなく、学会や報告会などの場で広く共有することが重要である。